
カメラさんと反射板

銀河美少年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カメラさんと反射板

【Nコード】

N0632P

【作者名】

銀河美少年

【あらすじ】

変態カメラマン（自称）ひらめきえいいち閃映一はいつも通りパンチラ写真を撮ろうとした所謎の女に殴られて気絶してしまった！どうなる映一！？

〈処刑部屋から愛を込めて〉（前書き）

まあ楽しんでってくれ楽しめたらの話だけれども

（処刑部屋から愛を込めて）

いきなり女に殴られた、

まるのも何だけどマジで殴られた痛いマジで痛い。

まあいい、こんな文章の始まり方で始めた俺も悪いからな、いきなり殴られたわけを話そう。

パンツを覗き見しようかと階段から降りてくる女子を下で待ち伏せていた所ナイスな美少女が来たんでカメラを用意し「いざ戦場へ！」と叫んでスライディングしながらシャッターを押そうとした、

その瞬間誰かに襟首を掴まれて顔を確認する間もなく殴られて気絶させられたとゆうわけなのだよハドソン君。

それじゃあ何故気絶したのに女だと判断できたんだ？と思うヤツ教えてやろう俺は女の臭いと男の臭いが判断できるのだ！どうだ？素晴らしい能力だろ？

つとまあそんな感じで気絶させられたんですよ、

途中死んだ筈のおじいちゃんが川の向こうで手招きしている風景を見たけど・・・、

でも大丈夫！俺の体はそんなにやわじゃない！さあ！目覚めよ！俺！きっと起きたら保健室のベットだ！そしてベットの隣には美少女がいるんだ！さあ！目覚めるんだ！

「ハッ！？」目覚めたぞ！ってアレ？保健室のベットじゃない？

ここどこ？ひらめきえいいち落ちつけ冷静になれ・・・まずは自己紹介から始めよう

俺の名前は 閃映一

趣味は昼寝エロ本鑑賞 好きな物は美少女とおっぱい 嫌いな物はキュウリとホラー系の物

うん、記憶はちゃんと残っているさて周りにある物は・・・

大鎌、ムチ、電気椅子、縄、

つとここはどこの拷問部屋ですか？

「目覚めたみたいね。」

前から女性の声がした

「誰？」

「ワタシノナマエはジュリーデース」

「いやあんた思いつきり純日本人だろ。」

「チッ！」

あのー舌打ち聞こえてるんですが・・・

「冗談はさておき、アンタなんで女子のパンツなんか撮ろうとしたの？」

「自己紹介ぐらいしてから質問しろよ・・・」

「アンタが質問に答えたら、教えてあげる。」

猛犬みたいな目で見られた・・・いや？よく見ると結構可愛いぞ！
？白くきめ細やかな肌、桜色の唇、筋の通った鼻、綺麗な足、胸の方は・・・

「バストサイズ73か・・・」

「誰が私のバストサイズを言え言ったああああ！！」

「スミマセンでした！」

しまった！考えてる事を口に出す癖が出てしまった！

「次ふざけた事言ったら電気椅子に掛けるからね。」

「じゃあストレートにゴホン」

俺は一度咳払いしてこう言った

「女子のパンツが見たかったからだああああ！！」

「自信満々に叫ぶことかああああああ！！」

「おい、あまり叫び過ぎるの喉に悪いぜ？」

「アンタが叫ばしてるんでしょうが！」

猛犬は息を荒くしてこちらを見ている・・・正直言う怖い。

「まあいいわ、アンタが答えたんだから私も名前を答えないとね。

私の名前は 虹川美鏡にしがわみきょう」

「俺の名前は閃映一だ、美少年だろ？」

「死んで全美少年に詫び入れて来い。」

「ガーン! なっ何だど! ? この俺が美少年じゃないだど! ?」

「シヨツク受けてないでちよつと私の話を聞きなさい。」

「何ですか貧乳娘？」

「殺すわよ、アンタ、カメラ持ってるんでしょ？」

「ん？ ああ持つてるけどってアレ！？ 無い！？」

「これの事？」

虹川は俺のカメラのネックを摘まんでいた

「ああ！俺のカメラ！返せ！」

手を伸ばそうとしたら動かないあらまあいつの間にか縄で拘束されてますよ奥さん

「カメラのフィルム焼いて見たんだけど、アンタいいアングルの撮り方できてるじゃない。」

意地悪そうな顔でこちらを睨んできた

「要件は何だ？」

「話が分かって助かるわ、単刀直入に言うわ。」

ゴクリと生唾を飲み込んだ、彼女はこう言い放った

「私と付き合ええええええええええ！！！」

[illegible]

これが俺達の最悪な出会いだった。

〈処刑部屋から愛を込めて〉（後書き）

「カメラさんと反射板」を読んで頂き
ありがとうございます。

コメントを送ってくれると嬉しいです

くドキッ変態さんの匠の罫?く (前書き)

まあ楽しんでってください

縄で拘束されて動けませんヘルプミー！

「じゃあ付き合ってもらいましょうか！この私の美しい写真集を出すために！」

「ハア？」

何だ？何を言ったんだ？

「じゃあアンタにカメラを返すわ」

「その前にこの縄を解けよ！」

「ああ、そうだったわね」

虹川は俺の縄を解くと俺にカメラを返してくれたお帰りマイカメラ寂しかったかい？

カメラ「全然」

今何か聞こえたような気がするけど気にしない気にしない

「さあ！撮りに行くわよ！私の美しい写真集を！」

「その前に！」

「まだ何かあるの？」

睨まないでください怖いですできればずっと子犬モードでいてくださいお願いします

「この拷問部屋、一体どこなんだ？」

「学校よ」

「嘘だ！」

学校にこんな場所あるわけ無いじゃないか！

「学校の地下室よ」

地下室何かあったのかこの学校 無駄使いしやがって

「じゃあこの部屋から出ようぜ」

「ええ」

そう言っただけ俺達は地下室から抜け出して外に出た

「うーん外はやっぱり気持ちいいなあ」

「さあボヤボヤしてないで早く写真撮るわよ！」

「その前にさあ」

「何よ」

「どんな写真集出したいの？そもそも何故に写真集なんか出したいの？」

「・・・したいから・・・」

「ん？」

「見返したいから！私の事いつまでもガキ扱いしてる奴らを見返したいから！」

「なるほど！つまり幼児体型って事をバカにされて自分の大人っぽい写真集を出したいと！」

「そう！」

「なるほどよし！分かった！」

「撮ってくれるの！？」

答えは決まっている・・・答えは・・・

「やだ！」

「殺す」

「スミマセンでした」

「でも今日はもう遅いから明日にしないか？」

「そうねじゃあ明日の放課後屋上で待ち合わせね来なかったら」

「来なかったら？」

「校内で見つけるたびに気絶させるからね」

「それだけはお勘弁を」

見つかるだけで気絶させられるのは御免だね

「じゃあまた明日」

「またな怪しい人について行くなよ」

「行かないわよ！」

（続）

くドキッ変態さんの匠の罠?く (後書き)

面白かったら何か言ってくれると嬉しいです

ゝ変態カメラマンの優雅な一日ゝ（前書き）

いつも通りのグダグダストーリーに付き合ってください
W
W
W

く変態カメラマンの優雅な一日く

ジリリリリリン！

うるさい目覚まし時計の音でまた今日も俺の一日が始まる。

「もう朝か・・・ふあゝ眠っ」

眠気を我慢してベットから這い出て来た所で
プルルルル

俺のケータイが鳴った

「誰だ？こんな朝早くに電話を掛ける奴は？」

見たことの無い電話番号だった。

「はい、もしもし？」

「アッ！やっと出た！遅い！私からの電話は0.1秒で出なさい！」
虹川さんからの殺気に満ちたモーニングコールだったみたいです。

「何か用か？」

「今日の約束、覚えてるでしょうね？」

「ああ、今日は虹川が俺にパンツを見せてくれる日だったよな！」

「違うわよ！ったく・・・今日は私の写真を撮ってくれる約束ですよ！」

ああ、そんな約束してたな。

「その件についてなにか？」

「特に無いわ、」

「なら電話切るぞ。」

「はい・・・約束破ったらブッコロス（ボソッ）」

ツイッター

さて、殺意満々なモーニングコールのおかげで目が覚めました

「朝飯でも食うか・・・」

誰もいないリビング・・・俺の親は父がカメラマン、母がそのカメラマンのアシスタントなので

外国で聞いたことの無い雑誌のカメラマンをやってるらしい、なの

で俺は一人暮らしである

一応、生活費は送ってくれてるから過ごせてるああ素晴らしき一人暮らし……

「感動に浸ってないで朝飯でも作るか……」

昨日買った5枚入りの食パンはこら辺に置いといたはず

「あったあった牛乳はっと……」

賞味期限切れてる……

「まあ、死にはしないだろ」

朝飯食い終わったし支度して学校行くか……メンドクセうーんもう冬がきてるからさむいなあ……

見慣れた登校中景色を見ながら我が高校に歩き始めていた

「おーい！映一！」

「ああ、何だ……お前か……」

「何だ……ってお前友達にとって失礼だろ！」

こいつのの名前は こはやしきょうや 小林京矢

「で何か用かよ？」

「なあ、お前知ってるか？」

「何を？」

「最近居残りしてる生徒が帰りに白い影を見た！ってゆう噂が流れてるらしいぜ」

「ヘーソーナンダー（棒読み）」

「何だよ、少しぐらい興味だせよ！」

「だって俺、美少女しか興味無いもん。」

「まあ、そう言うなって！その白い影が昔死んだ女の生徒の霊らしいぜ」

「ヘー」

「俺がちよっと学校の卒業生調べたんだけどさ……」

「フムフムソウカソウカナルホドーヘー」

「かなりの美少女だぜ。」

「詳しく聞かせろ。」

霊になってる美少女だって!?

これは調べた方がよさそうだ!

「そう言うと思ってファイル作ってきたぜ!」

「ありがとう! 相棒!」

「だから写真頼むぜ!」

「ああ! 任せておけ!」

うゝん霊になって出てくる美少女かゝ楽しみだなあゝ
ワクワクしてきた!

早く放課後にならないかなあゝ?

アレ? 何か放課後あった気がするけど・・・

まあいいか! よーし!

待ってろよ! 美少女幽霊!

美しく撮ってやりから待ってろよ!

ゝ続ゝ

く変態カメラマンの優雅な一日く(後書き)

まだまだ終わらないぞお！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0632p/>

カメラさんと反射板

2010年11月25日06時21分発行